

目的 糸むら試験器(東レ毛羽計数装置)と応用して、織物の表面毛羽測定器を組立て、織物の痕着による表面性状変化をとらえるための1つとして用いているが、毛羽計数曲線からは単なる表面の毛羽状態の変化だけではなく、平面体の織物としては、毛羽の方向性およびその変化傾向と、毛織物としては全体としての縮充状態をとらえることができないかと思ひ、構成の差の大きい毛織物を用いて調べた。

方法 試験布は毛織物4種(梳毛織物と紡毛織物)で、処理としては一般のドライクリーニング店のドライクリーニング、渦巻式洗たく機によるウェットクリーニング(弱アルカリ合成洗剤)、粉石けんのアルカリ液でマグネティック・スターラー攪拌による温熱水処理を行ない、処理後の毛羽計数曲線の変化状態と原布の曲線とを比較検討した。そして、これらと織物の構成要因や性能の変化を対応させた。

結果 梳毛織物(薄手・平織物)と紡毛の起毛織物(斜文織)の毛羽計数曲線について、たて方向とよこ方向の方向性の差の変化傾向が異なり梳毛織物は原布、処理布共にその方向性の差は小さい。紡毛織物は原布のときは、たて、よこの方向性が大きいが、処理条件がきびしい程、その方向性の差はわずかになる。また梳毛織物は毛羽長が小さい時の原布と処理による毛羽計数の差は小さいが、紡毛織物はその差が見られている。毛羽計数曲線の差の程度と織物の厚さ、圧縮特性との対応が見られた。